

コロナ休会が明けた後も、先導役の入院で再開が先送りとなり、5ヶ月ぶりの例会となりました。長いブランクにもかかわらず、常連の6名に久しぶりの1名が出席。声の衰えもなく、元気よく輪読に入りました。仁和寺六本杉での天狗の謀議、海没宝剣の出現騒ぎの後、ハイライトの四条畷合戦へ。高師直率いる足利軍が楠正行を倒し、吉野を焼いて、北朝に大打撃を与えました。

(二) 大塔宮の亡霊胎内に宿る事

仁和寺で天狗が内乱謀議 (p167~170)

ある夜、仁和寺の六本杉に、大塔宮はじめ天狗と化した数体の亡霊が集まり、世を乱す策略を協議する。その結果、各霊が現世の要人に乗り移ることとなり、その配置も決めた。大塔宮の担当は足利幕府の副將軍直義。その妻の胎内に宿り、高齢にもかかわらず懐妊して男子を出産。如意王と名付けられた。

(四) 伊勢国より宝剣を進す事

出現した宝剣の真否いかに (p177~182、

191~196、199

安徳天皇と共に海中に没した三種の神器の一つではないかという剣が伊勢国から進上され、その真偽鑑定が日野大納言資明に託された。資明は平野社の神主神祇大副兼員から宝剣の由来を聴取したうえ、確証となる奇瑞を求める。すると、足利直義が「伊勢大神宮から宝剣が献上される儀式」の夢を見たという。資明は、もう間違いないとして、院の御所にこの剣を奉返し、関係者には朝廷から恩賞が下された。これを知った日野資明の政敵、坊城大納言経顕は、「乱世無道のこの時世に宝剣が現れるはずがない。夢幻に頼るのも無定見だ」と鋭く批判。これにより、朝廷は宝剣認定と恩賞を取り消した。神器をめぐる中世の議論は、動乱が長引くにつれ、次第に不毛の色を濃くしていく。

(七) 四条合戦の事

足利氏、楠木楠正行討伐に大軍 (p208~213)

楠正成の遺児、正行は貞和3年(1347)、青年武將として軍事行動を開始。河内摂津方面で足利方の守護級武將を翻弄して、次々と戦果を挙げた。驚いた足

るよう、利尊氏は陣営切つての猛將、高師直、師泰兄弟を両將軍に起用して楠勢の討伐に向かわせる。両將は直ちに軍勢の編成にかかり、12月下旬には師泰が淀に二万余騎、師直が八幡に8万余騎を結集した。これを知った正行は師直との決戦を覚悟。「今生にて今一度、竜顔を拝す」為に後村上天皇の許に参内、さらちゅうくに、吉野山の如意輪堂の板壁に、討死を誓い合つた同志の名を過去帳に見立てて書き連ね、敵陣に向かった。

正行討死

(p224~226、231~232)

四条畷に戦端が開かれたのは、翌貞和4年正月5日朝。飯盛山脈と深野池に挟まれた南北に細長い狭隘な土地が主戦場となった。数に劣る正行隊は、まっしぐらに足利本さい隊に切り込み、血みどろとなって敵の大將、高師直に迫る。そして、ついに師直を討ち取つたと思いきや、それは師直の鎧に着替えた身代わりだった。夕刻まで戦つて満身創痍となった正行は、「もはやこれまで。敵に討たすな」と自害して果て、残る兵もこれに倣つて、数時間にわたる壮烈な戦いが終わった。

(一〇) 吉野炎上の事

皇居焼け、朝廷は賀名生へ (p234~238)

高師直の吉野攻撃を察知した南朝は、皇居を西吉野の僻村、賀名生に移した。皇族、公家の去つた吉野に攻め入つた師直は皇居だつた建物や蔵王堂などの寺社を焼き払う。南朝への壊滅的打撃を意図した当初からの作戦だったかもしれない。

第28巻朗読予定ページ(4年2月21日)

- 1) 330 右兵衛佐~331 相似たり
339 中国は~341 急がれける
- 2) 341 將軍すでに~345 失へり
- 3) 345 越智伊賀守~349 攻め上る
378 項王、すでに~380 なされける

*編集の都合で、4)以降は、朗読箇所を別書に変更。第28巻の後半を占める「項羽・劉邦の覇権争い」に代えて、太平記の中でも難解な「観応の擾乱」の一部を、現代文で予習します。利用するテキストは亀田俊和著「観応の擾乱」(中公新書)で、高一族の虐殺に至る経過をたどります。当日、プリントを配布します。